

## 生物多様性の4つの危機

生物多様性国家戦略では、生物多様性に対する危機は人間活動の直接・間接の影響を原因とする3つの危機に加えて、地球温暖化をはじめとした地球規模の環境変化による第4の危機が指摘されています。

### 第1の危機

捕獲や開発など直接的な人間活動がもたらす危機を指します。地球規模では、毛皮や象牙などを得るために野生動物が大量に捕獲されたことや、広大な範囲での森林の焼き払い、単一の樹種の植林によるモノカルチャーの拡大による生物種の減少、県内では大規模な土地造成や、道路や湖岸堤の建設などにより、生物の生息・生育環境が消失、劣化、分断されています。



開発や盗掘などにより減少しているクマガイソウ

### 第2の危機

自然に対する働きかけの縮小による危機を指します。

人間の営みは自然にも大きな影響を与え、原始的な自然は二次的な自然に置き換わってきました。いわゆる里山の雑木林や草地も人の暮らしの中で作られ、維持されてきました。

生物多様性に富んだこのような場所が人の自然への働きかけの減少により失われようとしています。本来奥山が生息の中心だったニホンジカなどの野生動物が里に出没し、農林業被害を起こしていることも、人の自然への働きかけの減少が原因の一つだと言われています。



椎茸のほだ木採取により里山の再生を目指す

### 第3の危機

人間が持ち込んだものによる危機を指します。

人間活動が広範囲化、活発化する中で、外来種や化学物質など、本来存在しなかったものを人間が持ち込むことで様々な問題が生じています。

琵琶湖では、1974年に初めてオオクチバスが確認されて以来、オオクチバスなどの国外外来種とオヤニラミなど国内外来種を合わせ10数種の外来魚の生息が確認されています。オオバナミズキンバイやコカナダモなどの外来水草の繁茂もすさまじく、外来種の駆除に多くの費用、人手がかかっています。



外来種のハルザキヤマガラシが広がる伊吹山山腹

### 第4の危機

地球規模の環境変化による危機を指します。今、世界の各地で起こっている災害が地球温暖化などによるものであることが指摘されています。日本でもサンゴの白化現象が確認され、海水温度の上昇が原因であると考えられています。

滋賀県でも、もともとは南方系のチョウとされてきたツマグロヒョウモンが県内に定着するなど、野生生物の分布の変化も見られ始めています。昆虫類の生理的反応の変化に影響する地球温暖化は、生物多様性にも大きな影響をもたらすと懸念されています。



以前は県内であまり見られなかったツマグロヒョウモン